

最後に成都で過ごした数日の記憶はあまり残っていない。日本への帰国をギリギリまで延ばす為、ビサ切れの最終日に帰国便のチケットを手配した私だったが、持て余す時間を埋める為一度近場の観光地に足を延ばした以外、ひたすら広い街の中を歩き回り、都会の空気に疲れていた事の他にこれといって思い出せることは何も無い。

だが今回の一月半の旅を経て私がこれまでに抱いていた中国という国に対するイメージは大きく変化した。2度の中国滞在では四川省にしか訪れていないので他の地方に関しては未知の事だが、過去に読んだ数々の旅行記や旅人達の噂話から抱いていた一般的な中国の印象とは裏腹に、この四川省という土地で出会った人々はチベット族、漢民族を問わず、何処も温かく私を迎えてくれた。

それを決定的に印象付ける最後の出来事は、出国の為に訪れた空港での事だ。チェックインを済ませた私は、出国カウンターを通る前に空港内の土産物屋のCD売り場に足を運んだ。実はそこにやってきたのは2回目で、前回先に帰国する母達のグループを見送りに来た際、店外に流れていた歌謡曲の印象的な旋律に心引かれた私は、その場で店員に頼んで流れている曲名を手帳に記して貰っていたのだ。

日本への帰国のこの日、使い残りの中国元の整理も兼ねて、あのCDを旅の思い出に買って帰りたいと再びその店に立ち寄った。ところが私が手帳に記された曲名を見せ、店員に取り出して貰ったCDの価格は、あろう事か私の持っている中国元全てをかき集めた額よりたった一元だけ高かったのだ。

ええ~~~~!! ずっとこのCDを買うのを楽しみにしてたのに~~~~!!!

思わず涙目になって途方に暮れる私を見ていた店員の女性が笑いながら言った。

「いいわ。一元は私のポケットマネーで出しといてあげるから」

「え？」

「いいわよ、持っていきなさいよ」

えええ~~~~!! 空港の売店で働く職員さんがこ

んな事言ってくれるのお~~!?!? なんて事だろう、やっぱり四川省の人ってすご〜く優しい!!!

あまりの嬉しさに飛び跳ねて喜んだ私は、お姉さんの手を握り、何度も何度もお礼を言って店を出た。欲しかったCDが手に入れた事も嬉しかったが、それより何よりこれまで多くの人の善意に支えられて続けてきた旅の最後まで、こんな素敵な思い出を残してくれたCD屋のお姉さんに、ただひたすら感謝! 感謝! だ。

これでますます四川省が好きになった私は、今回の旅の大成功に至極で満悦な気分となり、飛行機に乗り込んだ。これで万事めでたし、めでたしと思っていたら、旅の思い出はまだこのままでは終わらないのだ。

当時、成都から日本の成田までの便には直行便が無かった為、私の手配したチケットは北京でのトランジットとなっていた。

成都からの国内便が北京に到着すると、日本に向かう乗客は一度飛行機を降ろされ、空港のラウンジに通されて国際便のフライトを待つ事になるのだが、国際便に乗り換える乗客は待合ラウンジに入る前の小部屋にあるカウンターで、出国カードを記入し提出しなければならなかった。そのカードを記入する為、私は手荷物として手に持っていた、登山用の杖をカウンターの下の棚に乗せたのをすっかり忘れたまま、出国カードを提出し隣の空港ラウンジの部屋に移動してしまったのだ。ラウンジのソファに座り、ふう! と一息ついたところで、自分がこれまでずっと握りしめていた杖がなくなっている事に気が付いた。

あ! 忘れた! 先ほどの部屋に戻ろうとすると、ちょうど空港職員の女性スタッフが最後の乗客を送り出し、ラウンジに至る通路のドアの鍵を閉めたところだった。

「すいませ~~~~ん! 忘れ物しちゃったんだけど」職員が立ち去る前に間に合った安堵で、笑顔を見せながら私が声をかけた瞬間、「はああ?」眉間に皺を寄せ、不愉快そうに顔を歪めた女性スタッフは、怖ろしく険しい顔で「何よ?」と聞き返した。

「中に忘れ物したんです」

「駄目よ」

「え？」

「もうドアの鍵をかけたわ」

「だって鍵は手に持ってるんだし、ちょっと開けてくれたって・・・」

「駄目だって言ってるでしょう!」

「そこを何とか・・・」

出国カードを記入したテーブルはガラスの壁を通して直ぐそこに見えているし、亜丁やこの旅の先々で一緒に登山した思い出が籠っている杖だ。そう簡単に諦めたくない私は立ち去ろうとするサービス員にしつこく食い下がると、その女性サービス員は般若のように顔を歪め「あ~~~~っ!!! 面倒臭いわねえっ!」と怒鳴り声を上げながら、乱暴に手に持っていた鍵を差し込んで、やっと隣の部屋との間のドアを開けてくれた。

こんなやり取りの方がよほど面倒だし、たかがドアを開ける位の事で、そんなに鬼みたいな顔して怒鳴らなくても・・・それまで出会う人ごとに優しくされ続けていた私には、ちょっとしたカルチャーショックだった。

これはまさに噂に聞いていた幻の中国人そのものだ。ついに会ってしまった。怒鳴りつけられ小さくなりながらも、やっと扉を開けて貰えた嬉しさで、件のカウンターに駆け寄ったのだが、杖は私の目を離れたほんの一瞬の間に誰かに持ち去られてしまったのか、それとも職員に片づけられてしまったか、既に姿を消していた。これではどうしようもない。できれば部屋の奥のスタッフルームにいる空港職員に忘れ物の有無を尋ねたかったが、部屋の入口では般若のような顔をした女性サービス員がこちらを睨みつけているし、ションボリと元のラウンジに戻るしかなかった。

扉の脇では件のサービス員が苛立ちが頂点に達したような顔で私が戻るのを待っていた。「謝謝・・・」何はともあれ、ドアを開けて貰った事に対するお礼の言葉を掛けた私に、サービス員は怒りに顔を歪ませながら「全く、余計な手間かけさせやがって!!!」と吐き捨てるように言った。

思い出の籠った杖を失くした悲しさとサービス員に怒鳴りつけられたショックで、先ほどまで膨れ上がっていた風船が小さく萎んでしまったような気分だ。失せ物は自分のせいなので仕方ないにして

も、これが四川の空港だったら、サービス員は直ぐに笑顔でドアを開けてくれたに違いない。それは勿論個人の性格差もあるのだろうが、少なくともこの旅の間中でそんな態度の人に出会ったのはこの時が初めてだ。土地が変わればこうも人種が違うのかと、改めて中国国土の広さを再認識させられた事に舌を巻く思いだった。

失くした杖はそもそも私が初の本格登山である富士山に挑んだ時に¥100ショップで購入した、単に杖の形に加工された木の棒だったが、どれ程つまらない物だろうと初の富士登山や今回の旅の間中を共に歩いた思い出が籠っていた。亜丁で最後に山を下りた時出会った馬方のおじいさんが「ほう〜これはいいなあ〜」と羨ましがりに私の杖を手にとった時、余程そのおじいさんにあげようかとも思ったのだが、何しろ旅の道中をずっと一緒に過ごした杖には、それすらも躊躇したくらいの愛着があったのだ。

あああああ~~~~、こんなところで失くしてしまうなら、あの亜丁のおじいさんにあげれば良かったあああ~~~~~..... 激しい後悔に気持ちが沈んだ。まったく最後までジェットコースターのようにアップダウンの激しい旅だ。すっかりションボリしてしまった私だが、こんな事で楽しかった旅の最後の気分をつまらなくしたくない。まあ、いいや。最後の最後に噂に聞いていた伝説的な中国体験ができて面白かったという事にしておこう。気を取り直して思い直せば、確かに先ほどの女性サービス員のキラッぷりは話題性十分に面白かったし、これでまた一つ旅話の種が増えた訳だ。

国際便のフライト時刻となり、いよいよ日本に向けて飛び立つ飛行機に乗り込んだ。私の席の隣には日本の東北地方から旅行に来たという中高年のおばさん達のグループが明るくワイワイと賑わっていた。中でも一際明るい私の隣に座っていたおばさんが早速私に話しかけてくる。

まあ! あなた一人で旅行? 怖くないの!? 何処に行ったの? 私達は九寨溝に行ってきたのよ! きれいだったわあ~~~~、ずっと憧れていた夢がかなったのよお~~~~。

いよいよ旅を終え日本の現実世界に戻らねばならない喪失感と、杖を失くしてテンション下がり

気味の私には、最初はちょっぴり疎ましく思っていたおばさんだったが、徐々に開けっぴろげに素直で明るい人柄に心がほぐされ、途中からはすっかり親しみがわいてしまった。

お菓子を分けて貰ったり、機内食の感想を言い合ったり、機内で放映されていた中国映画を退屈のぎに皆で鑑賞し、ねえ、多分あれが娘の母親なのよ。きっと都会に行くのを反対されて喧嘩してるんだわ。あー、恋人と結婚したんだ。あれ？ いつの間に子供ができたの？ と、訳が解らないながらも皆の想像で映画のストーリーを組み立てて、かましい映画鑑賞は大いに盛り上がり、日本に着く頃にはおばさん達との別れに名残惜しささえ感じた程だ。

いつも旅の空を日本に戻る飛行機の中では、旅が終わってしまった空虚感と脱力感に苛まれるのが常だが、今回に関してはおばさん達のおかげで最後まで十分楽しく過ごさせて貰った。そうして飛行機が成田に到着し、出国ロビーを通過してエアポートリムジン乗り場に向かってもまだ私の幸運は続いていた。

日本時間で深夜間際に到着予定だった私の乗っていた飛行機は、多少定刻に遅れての着陸だったのが、終電間際の遅延のお詫びという事らしく、バス乗り場に辿り着いて私が聞かされたニュースは、新宿まで¥3000程かかるリムジン代金はサービスとの事だ。

これまでの貧乏旅ですっかり節約根性が身についていた私に、これは興奮の大幸運だ。

えええ~~~~~!!! やった~~~~~!!!

手ベットの神様に見守られ、多くの人の善意に助けられて続けられた今回の一人旅は、これで大団円だ。最後の最後の最後まで、やはり私の旅は最高にツイていた。

(終り)

🌀 追記

日本に到着してから暫くは違和感でいっぱいだった。成田空港で入ったトイレは人の気配を察知して自動的に便座の蓋が上がり、用が済んで立ち上がれば自動的に水が流れる。洗面台の蛇口もしかり。手を差し伸べればセンサーが察知し自動的に水を流す。いったいこんな事が人の生活にとり、どれ程必要であるのだろうか？

そう遠くない過去の時代には、人は自ら水を汲み、マキを割り、火をおこして暮らしていた筈だ。それがホンの数十年の時を経て、現代の人間はトイレの蓋を持ち上げ、水を流す事さえ自身で行う事を厭うようになったのだろうか？ 少なくとも私は、「それくらいの事自分でやるから結構です」と申し上げたい。たったこれだけの事の為に、いったいどれだけの自然に犠牲が払われ、無駄に電力が消費されているのだろう。

2011年の大地震により福島原発では深刻な事故が引き起こされ、被災し避難を余儀なくされた人々は故郷に戻る事も叶わず、放射能汚染の影響による恐ろしい健康被害が今後どれ程日本の未来に影を落とすのか、その程度は未だはかり知れない。そんな事態に直面しても、まだ余計な贅沢をする為の電力を得る為に原発の必要性を訴える人々の存在がある事に、私は驚きを禁じ得ない。

自分たちのつまらない利便性や無駄な快適さの為に、どれだけの犠牲が払われているのか、それすらも考えが及ばない人々とはいったいどれほど鈍感で無知で無神経で想像力が欠如しているのだろう。誰かが言っていた。「電力が足りなければ経済が発展しない」。これ以上、経済が発展して、国民はいったい何が得られるのだろうか？ 経済など発展していなくても、幸せに暮らしている人たちはこの世界にごまんと存在する。昭和から平成に時は移り、昭和から平成に時は移り、日本社会は経済発展に向かって一目散に走り続けてきた。人々の暮らしは利便性と娯楽と快適さにおいて飛躍的に進歩を遂げた。が、その結果人々は幸せになっているのだろうか？ 経済の発展を追い求める事で潤っているのはいったい誰なのか？ 原発の問題のみならず、様々な分野で人間の無駄な贅沢欲を満たすためだけに、かけがえない多くの自然が失われ、多くの動植物が絶滅した。他の生命体にまで壊滅的な打撃を与えて尚、知らん顔をして経済発展など目指すのは、地球規模での犯罪行為ではないのだろうか？

地球上に暮らしているのは我々人間だけではない。

人間などこの地球上に自然の一部として暮らす、多くの生命体のほんの一種であるだけだ。今回記したこの旅を経て、今の現代社会の現実に思いを馳せるたび、私の脳裏には、厳しい自然の中、布でくるまれたテント一枚の中で生活し、水牛の糞で暖を取りながら野原を走り回っていた子供達の明るい笑顔が掠めていくようになった。